室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

動詞類と名詞類の区別の普遍性について：ハワイ語における品詞分類への適用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): Hawaiian language, Language universals, Part of speech 作成者: 塩谷, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2862

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

動詞類と名詞類の区別の普遍性について : ハワイ語における品詞分類への適用

その他（別言語等）のタイトル	The Universality of the Noun / Verb Distinction : Application to the Word Classification in Hawaiian
著者	塩谷　亨
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	50
ページ	141-148
発行年	2000-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/2862

室工大紀要第50号(2000)141～148

動詞類と名詞類の区別の普遍性について
―ハワイ語における品詞分類への適用―

塩谷　亨*1

The Universality of the Noun / Verb Distinction
―Application to the Word Classification in Hawaiian―

Toru SHIONOYA

(原稿受付日　平成12年4月28日　　論文受理日　平成12年8月31日)

Abstract

This article investigates two word classes, NOUN and VERB, as universal categories. While some linguists agree that two word classes, NOUN and VERB, are to be considered as universal, the universality of the distinction noun/verb is questioned by some linguists. For example, in Polynesian linguistics, some linguists propose a multifunctional word class which can be used as both noun and verb. A word in the multifunctional class belongs to neither NOUN nor VERB in itself, but its function is determined by the context. The purpose of this article is to show some evidence against the universality of the noun/verb distinction and to give some argument for proposing the multifunctional word class. In doing so, data from Hawaiian are examined.

Keywords: Hawaiian language, Language universals, Part of speech, Word class

1　はじめに

1．1　品詞分類の必要性

ある言語の単語を何らかの基準に従って分類したものは一般に品詞(part-of-speech)、或いは語類(word class)等と呼ばれる。ある言語の記述という作業、具体的には文法と辞書の編纂という作業を体系的に行うにはこのような品詞分類が不可欠な道具であることは言うまでもない。同様に、教育現場等で或言語の文法を教授する際にも品詞という単位は不可欠なものである。

ある特定言語の記述の道具という意味では、個々の言語の記述という目的のために効果的な品詞分類をそれぞれの研究者が独自に設定すれば良いわけであり、そこで設定された品詞分類が他の言語について設定された品詞分類と全く異なっていても問題はない。例えば、一般的に品詞分類として用いられている名詞や動詞等のラベルの代わりに、単に語類I、語類II等のラベルを付して、他の言語の品詞と全く関係性を示さないような品詞分類でもよい訳である。

しかしながら、実際には、世界中の様々な言語、全く異なる地域の諸言語、或いは、歴史的に同じ系統を持つとされていない諸言語の記述の多くが同様に名詞や動詞など一般的に広く用いられている品詞分類を用いてなされている。これは、例え

*1 共通講座

ば名詞や動詞と言った品詞の特徴付けについて、異なる諸言語の間でもある程度の普遍性が見られるということを示唆している。とは言え、多くの場合、言語記述における品詞分類は基本的にその言語の独自の基準を立てて分類したものであるのが普通であり、たとえ名詞や動詞という同じラベルを用いていたとしても、必ずしも同じものを指しているという保証はない。

言語類型論や言語普遍性の研究に於いては複数の異なる言語を比較対照するわけであるが、その場合にも品詞分類という道具が不可欠である。この場合、個々の言語における個別的な分類を用いているのでは正しい比較対照が困難である。例えば、動詞という分類を用いて比較対照する場合には、それらが同じ基準により分類された動詞であることが必要である。従って、ある一つの特定の言語の効果的な記述のための品詞分類だけではなく、いろいろな言語に等しく適用できる普遍的な品詞分類というものが必要となる。

1.2　本稿の目的

本稿ではいろいろな言語に適用できる普遍的な品詞分類として言及されている動詞と名詞という二つの区別が普遍的なものであるのかについて、ハワイ語の分析に基づいて検討する。

品詞分類にはいろいろな立場があるが、本稿では次のような立場を取る。

(1) 単なる文法記述の道具としての品詞分類ではなく、話者の心理的実在をより反映する品詞分類。

(2) 単にある単語が文中でどのような機能を持っているかを示す品詞分類ではなく、一つの単語それ自体に内在する素性としての品詞分類。

このような立場から、動詞と名詞という区分の普遍性を論ずるに際しては、話者がそのような区分をある一つの単語それ自体に内在する素性として、認識しているかどうかという問題に対する一つの答えの提示を試みる。

又、本稿で品詞分類の対象とするのは、文法機能等の指標となる限られた数のいわゆる機能語ではなく内容語である。機能語は内容語の分類の基準として活用する。

2　名詞と動詞の普遍性

2.1　普遍的に適用できる品詞はどれか

機能語を除くいわゆる内容語の品詞分類としては、名詞、動詞、形容詞、副詞の４つが一般的である。この中で、形容詞と副詞という分類は普遍的には適用できないが、名詞と動詞に関しては普遍的に適用できるという立場が広くとられている。

例えば、形容詞にあたるものが全て統語論的、形態論的な基準から動詞の仲間に分類され、その結果残るのは普遍的には動詞と名詞だけという言語がある。ポリネシア語がその例であり、例えば、ハワイ語では、形容詞にあたるものは状態動詞によって表される。状態動詞は動詞と同様の位置に置かれ、動詞と同様に用いられる。副詞についても同様で、状態動詞の多くが副詞として用いられる。

mālie という単語は状態動詞に分類されるものだが、動詞として用いる場合は「穏やかだ」の意味で述語となることができ、形容詞的な用法では、「穏やかな」という意味で名詞を修飾し、また副詞的な用法では「穏やかに」の意味で動詞を修飾する事が出来る。

(3) mālie iho la　　ke　kai
calm DIR DEM ART sea
'海が穏やかだ'　S:47

(4) he mau　lā　　mālie kekahi.
PL　day　calm too
'穏やかな日もある'　K:102

(5) ʻōlelo mālie　aku ʻo　Iwa
speak calmly DIR NC Iwa
'イヴァは穏やかに話した'　- S:31

このように、形容詞も副詞も動詞の下位グループである状態動詞によって表されるため、形容詞と副詞という語類は必要ないのである。

2.2　名詞・動詞という区分の普遍性

動詞と名詞という二つの語類を用いることにすると、新しい問題点が浮かび上がる。すなわち、名詞と動詞の両方に属する単語というものを認めるのかどうかということである。言い換えると、いつでも、名詞／動詞という明確な区分けが適用できるのか、どちらとも判断しかねる場合はない

のかということである。

名詞／動詞の区分けは普遍的ではないと指摘する言語学者の根拠は、言語によっては、動詞と名詞とをはっきりと区分できない場合があるということである。Martinetによれば、マダガスカル語には動詞にも名詞にもなる一連の単語があり、例えば、fivorianaという単語は場合によって“会合”又は“会合がある”のように訳さなければならない。(1)

これに対して、動詞／名詞の区分が普遍的だとする言語学者は、言語によって、動詞と名詞の間の文法的な違いの程度にこそ差があるものの、動詞／名詞の区分は普遍的に適用し得るはずだと主張する。(2)(3)この立場からすると、前述のマダガスカル語の例は、同音異義語として、或いは、一方の品詞からもう一方の品詞が派生したものとして分析されると思われる。

ポリネシア諸言語には、同じ形で名詞にも動詞にも用いられるという単語の数が著しく多い為、品詞分類においては、動詞／名詞の区分を越えて、動詞にも名詞にもなれる語類を、動詞や名詞とは独立して別に設けることがしばしば見られる。例えば、Pawleyによるサモア語の句構造の記述における品詞分類では、N類（およそ名詞類に相当）とV類（およそ動詞類に相当）の他にもう一つU類というのを設けてその中に、N類V類の両方の環境で用いられる単語を含めている。(4)

本稿で扱うポリネシア諸語の一つハワイ語の先行研究においても、名詞と動詞の両方として使える語類を設けたものがある。Elbert and Pukuiは名詞類と動詞類に加えて名-動詞類(Noun-Verb)という分類を設けているが、それは、名詞としても使うことが出来る動詞として定義されている。(5)明確に述べられてはいないが、元々動詞である語が名詞化して使われているという意味だと思われる。一方、Pukui and Elbertでは同じく名-動詞類(Noun-Verb)という分類を設けているが、定義の方は、名詞としても動詞としても使える語基のようになっており、名詞とも動詞とも明示されていない。(6)この後者の分析については後で吟味する。

3　ハワイ語における動詞／名詞区分の基準

3.1　形態論的基準

品詞分類に用いられる基準の一つとして形態論的な基準がある。これは、基本的にはある単語がどのような活用をするのかによって分類するものであり、同じタイプの活用をする単語が同じ語類にまとめられる。

ハワイ語に関しては、活用的なものはほとんど失われてしまったため、活用のタイプを基準に品詞分類をすることは不可能である。

活用のタイプによる分類の他に、形態論的な品詞分類の基準として、派生接辞を手がかりにした基準を用いることがある。通常、このような分類はある言語の単語の一部にしか適用できないため、これだけで言語全体の分類をすることは困難である。

3.2　意味論的基準

品詞分類の二つめの基準として、意味論的な基準を見る。これは言語形式に関係なく意味によって分類するものなので、それぞれの言語の個別的な特徴に関わりなく普遍的に適用することができる。今回は、杉浦のたてた意味論的な分類に基づく９つの語類を参考に、それを一部利用して、行為、状態、事物の三つに分類する。(7)杉浦は変化・状態という語類を設けたが、それを行為と状態の二つに分けた。ハワイ語の内容語のほとんどが（一部の限られた数の単語のグループを除き）この三つに分類できる。

行為を表す単語には、例えば‘ōlelo「話す」holo「進行する」‘ai「食べる」等が含まれる。

状態を表す名詞には、例えばnani「美しい、美しさ」、maikai「良い、良さ」、malie「穏やかな」等が含まれる。

事物を表す名詞には、例えばnoho「椅子」kalo「タロ芋」kanaka「人間」等が含まれる。

3.3　統語論的基準

品詞分類に用いられる最後の基準として、統語論的基準がある。これは、ある単語が文中のどこに現れるか、又は、ある単語がどのような機能語と共起するかによって分類するものである。

この種の基準は、ポリネシア諸語では広く用いられている。動詞については時制・相マーカーと共起するものとして規定し、名詞については限定詞と共起できるものとして規定することによって、効果的な分類をすることができる。

ハワイ語の動詞については、完了相又は未完了相のマーカーと共起するものとして定義できる。

(6) Ua ‘ai lākou a lawa.
PER eat they until enough
‘彼らは十分食べた’ P: 23
(7) E māmā ‘awa ana lāua.
IMP prepare kava drink DEM they
‘彼らはカヴァ飲料を用意している’ S:247

例文６の‘ai と例文７の māmāは、それぞれ、完了相のマーカーua、未完了相のマーカーe と共起しているので、どちらも動詞とみなされる。
名詞については、限定詞（冠詞 ka、ke、nā、所有形、指示詞等）と共起する物として定義できる。

(8) i loko o ke kula
LOC inside of ART school
‘学校の中で’ H:42
(9) i kela makahiki
LOC that year
‘あの年に’ H: 43

例文８の kula 例文９の makahiki はそれぞれ、冠詞 ke、指示詞 kēlāと共起しているので名詞と見なされる。
このような基準でほとんどの内容語の分類が可能である。

4　ハワイ語の名詞/動詞区分の曖昧性

4.1　名詞類と動詞類の著しい重なり

前の節で動詞として分類された単語の非常に多くが、名詞としても用いられる。その際に、名詞化するための要素等はなくても、そのままの形で名詞として用いることが出来る。
全ての単語を調べることは不可能であるが、状態を表す単語に関しては、その極めて多くが、名詞と動詞として頻繁に用いられる。状態名詞として用いることが出来る。例えば nani「美しい、美しさ」、ikaika「強い、強さ」は次のように用いられる。

(10) ua ikaika loa kona lele ‘ana
PER strong very its fly GER
‘その飛び方はとても力強い’ K:118
(11) a pahu maila iā Umi, me ka ikaika
and push DIR ACC Umi with ART strong
‘そして海を強く押した’ S:145
(12) a ua nani maoli ka ‘ilihonua
and PER beautiful really ART surface
‘そして地表は本当に美しい’ K:92
(13) helu ‘ekahi o ka nani
No. 1 of ART beautiful
‘美しさのナンバーワン’ K :80

この他、maika‘i「良い、良さ」、mālie「穏やか」、onaona「香しい、香しさ」も同様である。
又、行為を表す単語も名詞としても動詞としても広く使える。例えば‘ōlelo は名詞としては「話」、動詞としては「話す」となり、holo は動詞としては「進行する」名詞としては「進行」となる。

(14)‘O neia mau ‘ōlelo āu
NC this PL speaking your
‘あなたのこれらの話’ S :59
(15)‘Ōlelo hou mai ‘o Umi iā Iwa
speak again DIR NC Umi to Iwa
‘ウミがまたイヴァに話した’ S:31
(16)ua holo aku ke ali‘i
PER proceed DIR ART chief
‘首長が進んだ’ P:22
(17)inā e ho‘opa‘a i ka holo
if IMP make fast ACC ART proceeding
‘もし進みを早めたら’ P 65

上記の例のうち、名詞として用いられている例は全て定冠詞と共に用いられている例であった。実際にはいろいろな限定詞と共起する。ハワイ語の限定詞には、冠詞の他に指示詞、所有形等がある。

(18)kou hea mau i ko māua inoa
your call always ACC our name
‘あなたがいつも我々の名を呼ぶこと’ F:106

例文１６の hou は「呼ぶ、呼ぶこと」という意味で名詞としても動詞としても用いられる単語であるが、ここでは、名詞として、所有形 ko māua「我々の」と共起している。
以上に挙げた例はいずれも動詞と名詞の意味が予測可能な場合であったが、予測可能でない場合も多くある。例えば、noho は「座る」と「椅子」の二つの意味がある。確かに、関連深い意味であるが、このような例の多くでは、名詞の意味と動詞の意味が必ずしも体系的に対応せず、予測可能

と言えない場合が多い。従って、同音異義語とみなすのが適切であろうかと思われる。

一方で、名詞が動詞として使われる明確な例はほとんど見られない。

4.2 曖昧性の解決策

4.2.1 同音異義語又は派生

このように動詞類と名詞類のどちらに属するかわからないような場合の解決策として、よく言及されるのが、同音異義語と派生である。

同音異義語としての分析では、例えば、holoという単語は「進行する」と「進行」という二つの同音異義語を持つ、のように分析される。しかしながら、極めて数が多く、しかも体系的に対応も見られるものも全て一緒に同音異義語として片づけることに、どれ程の意義があるかは疑問である。

派生の場合には、例えば、holoという単語の場合、元々「進行する」という動詞だったものから「進行」という名詞が派生した等のように分析される。しかしながら、多くの場合、どちらがどちらから派生したのか決定することは困難である。

4.2.2 Pukui and Elbertによる分類

Pukui and Elbertは、動詞としても名詞としても用いられる単語を名-動詞類と呼んで、動詞類（動詞としてしか用いられない単語）と区別したが、その際に、名詞-動詞類を、動詞を名詞化する小辞‘anaの付加なしでも名詞として用いられる単語と定義している。[6]実は、この動名詞化小辞‘anaは、ハワイ語にも明確な動詞・名詞の区分があると主張するための有力な根拠となる可能性があるものの一つである。動名詞化小辞‘anaを動詞の後ろに置くことによって、その動詞を名詞化することができる。

(19) ua lō‘ihi ke ka‘awale ‘ana
PER long ART be separated GER
‘離れ離れが長かった’ S:137

例文１９では「別れていること」という状態を表す名詞になっているが、行為を表す動詞（例 ‘ai「食べる」）に‘anaが付加されると行為を表す名詞（例「食べること」）のようになる。従って、名詞として用いられている単語のうち、‘anaが付加されているものを本来の動詞として分類することが可能であるように思われる。しかしながら、この‘anaの付加は必須ではないのである。すなわち、一般に動詞を名詞として用いている例と思われ、‘anaの付加が予期されるような場合でも、‘anaが付加なしで名詞として用いられていることが多々ある。

(20) ‘o kāna waiwai nō ka lawelawe nā ‘olua.
NC his value INT ART serve for you
‘実際彼の価値はあなた方のために仕えることだ’ S:137

lawelaweは‘anaなしでは名詞として用いられない動詞とされているが、ここではなしで「仕えること」という名詞として用いられている。このように、‘anaの付加は必須ではないことから、明確な動詞・名詞の区分の基準とはなり得ないのである。

更に、Elbert and Pukuiによれば、‘anaは名詞にも付加されることがあるとして、次のような例を示している。[5]

(21)ka ‘āina ‘ana
ART land GER
‘土地を与える事’ G:80

‘āina 通常は「土地」と言う意味の名詞であるが、このように‘anaを付加することによって、ここでは何らかの行為的な意味を添えられている。このほかの場合には‘āinaが動詞として用いられる例は見られない。このように、通常専ら名詞として用いられる語に‘anaが付加された場合にどのような意味が付与されるのかについては、まだ分析途上であるが、‘anaが場合によっては名詞にも付加されるという事実を考えると、動詞・名詞の区分の基準としての‘anaの適切性には疑問が生まれる。従って、このような規定によっては、名詞と動詞という区分も、或いはPukui and Elbertの提示する動詞類と名詞-動詞類という区分も困難であると思われる。

4.3 語彙固有の情報としての名詞・動詞

前の二つの節において、統語論的な基準に従って動詞・名詞の区分をした場合にどのような不便があるかを示した。結局の所、統語論的な基準で規定されるのは、語彙の特性というよりも、やはり、文中の機能なのである。それに基づいて、動詞・名詞等と分類した場合、それは、果たして、

本当の意味での単語の分類なのかは疑問である。

また、ある一つの単語固有の情報として、動詞・名詞の区別は本当に必要であろうか。例えば、hele「行く」という単語固有の情報としては＜「行く」という行為を表す＞ということが含まれていることは明白であるが、それと一緒に、＜動詞である＞といった情報も含まれている必要はあるのだろうか。これまでの例を見た限りでは、動詞・名詞という情報は文脈から来ているように思われる。

5　結び

5.1　意味論的基準による三つの語類

動詞・名詞という区分がそれぞれの個々の単語に素性として内在するとみなすべき十分な根拠はないように思われることから、本稿では、動詞・名詞という区分を越えた品詞分類として、意味論的な基準に基づいた類別を提案する。3.2節で示した分類に従って、行為を表す単語、状態を表す単語、事物を表す単語をそれぞれ、行為類、状態類、事物類の三つの語類に分類する。ハワイ語に関しては、この三つの分類によって、ほとんどの内容語は網羅できる。ただし、今回はより典型的な動詞名詞に的を絞ったため、時間、空間、数量等の単語を割愛している。

これら三つの語類は、いずれも、動詞とも名詞とも限定されていない。従って、動詞としても名詞としても用いることが出来るような、多機能な語類であり得る。実際、4.1節で見たように、行為類と状態類は、名詞としても動詞としても用いられる多機能の語類である。又、同様に、いわゆる名詞や動詞と呼ばれる物が全て一緒に分類されているとは限らない。行為類、状態類、事物類、全て名詞として用いられることが出来るものであり、行為類、状態類はどちらも動詞として用いることが出来るものである。

動詞・名詞の区別が個々の単語に内在していないとすると、動詞として用いられるのか、名詞として用いられるのかは、文脈によって決定されることになる。

行為類に属する単語については、文脈によって次のような図式のとおりに、動詞や名詞としての意味を付与されると考えることができる。

(22)時制・相＋行為　＝＞　行為をする（動詞）
(23)限定詞　＋行為　＝＞　行為（名詞）

例えば、例１４－１５で示した‘ōlelo及び例１６－１７で示したholoという単語はそれぞれ「話すという行為」、「進むという行為」という意味をもった単語であり、どちらも行為類に属する単語である。時制・相マーカーと共起する時はそれぞれ「話す」、「進む」のように、「ある行為をする」という意味の動詞として用いられる。また、限定詞と共起するときはそれぞれ、「話」、「進行」のように、行為名詞となる。同様に、状態類に属する単語については次のように図式化される。

(24)時制・相　＋　状態＝＞状態である（動詞）
(25)限定詞　＋　状態＝＞　状態（名詞）

例えば、例１０－１１で示したikaika及び例１２－１３で示したniという単語はそれぞれ「強いという状態」、「美しいという状態」という意味をもった単語であり、どちらも状態類に属する単語である。時制・相マーカーと共起する時はそれぞれ「強い」、「美しい」のように、「ある状態である」という意味の動詞として用いられる。また、限定詞と共起するときはそれぞれ、「強さ」、「美しさ」のように、状態名詞となる。

このように少なくともハワイ語のような言語では、動詞・名詞区分に固執して名詞、動詞と区分するよりも、意味論的な基準によって、機能的には多機能な分類をすることによって、より恣意的でない、より自然な品詞分類をすることができた。しかも、（２２）－（２５）に示したような形で、統語論的、或いは機能的な区分としての動詞・名詞にも体系的に対応させることが出来た。

このような分類は、少なくとも、ハワイ語のような、動詞と名詞の間の形態論的な差異が極めて少ない言語には特に有効と思われる。しかし、意味論的な基準は言語間の個別的な違いを越えて適用できるものであるので、他のタイプの言語にも適用できるものである。従って、普遍的な区分としては、動詞・名詞という区別ではなく、行為、状態、事物というような意味的区分を設けて、その後で、個別言語の様々な手法で動詞や名詞という機能を付与されるとする方が、より普遍性は高いと思われる。又、意味的な分類であれば、何らかの意味で、話者が認識していることは予想でき、その意味では話者の心理的実在をより反映していると思われる。

しかし名詞でしか用いられない語が多く存在することは事実である。従って、そのような語を名詞として分類し、名詞としても動詞としても用いることが出来る語を動詞と分類するような二分法は可能であると思われるが、果たして、そのような分類がどれほど効果的かは疑問である。

尚、今回の品詞分類では杉浦と同じく接辞付加による派生語は含めていない。(7)

5.2 今後の課題

これまで行為類と状態類が動詞と名詞の両方として用いられる例を見てきたが、事物類に関しては名詞として用いられている例しかみてこなかった。事物類が動詞として用いられる事はないのであろうか。名詞・動詞という区別がそれぞれの単語に内在しないとすれば、事物類が動詞として用いられるのを防ぐものは、少なくとも、文法的には、何もないはずである。

希な例としてではあるが、Elbert and Pukui が名詞が完了相を表す時制・相マーカーと共起する例を提示している。(5)

(26)Ua keiki kākou na ke Akua.
PER child we for ART God
'我々は神の子である' B: Roma 8.16

例文２６では、事物類の単語である keiki「子供」に完了相を表すマーカーua と共起している。ここでは ua keiki は「子供である」という意味を表し、動詞的に用いられている。しかしながら、この明確な類例として認められるものは見当たらなく、これだけで事物類も動詞として用いられ得るという結論を出すには不十分である。

まだ分析途中であるが、「彼は侍従です」のような名詞述語文に関して、事物類が時制・相マーカーと共起している例として分析できるのではないかという可能性がある。

(27)he kahu 'o ia
attendant he
'彼は侍従です' P:2
(28)he wahine ke kanaka mua loa
woman ART human first
'最初の人間は女性だ' M:4

この he が何であるかについては、不定冠詞、前置詞、動詞等と様々な分析が示されているが、まだ、明確な答えは得られていない。一つの可能性として、この he を時制・相マーカーとみなす分析も考えられる。ハワイ語には同じ he という形で現在時制（無時間時制、一般時制とも呼ばれる）を表す時制・相マーカーがあり、習慣・属性的な行為や状態を表す場合に動詞と共に使われる。

(29)he inu kī au.
PRE drink tea I
'私はお茶を飲む' HP 58
(30)He ne'e mālie aku a i loko o ka wai
PRE move slowly DIR until inside of ART water
'ゆっくりと水の中まで移動する'
N:11/7/1863:1

例文２９－３０はいずれも he＋動詞が習慣・属性的な行為を表している例である。又、それが現れている文中の位置は例文２７－２８における he と同様である。従って、例文２７－３０は、少なくとも表面上は、同様の構造を持っているように見える。例文２７－３０の構造を一般化すると次のようになる。

(31) he V／N (主語) (その他)

また、例文２９－３０で he＋動詞が習慣・属性的な意味を表しているのと同様に、例文２７－２８の he＋名詞も習慣・属性的な意味を持っているという点でも共通している。もし、例文２７－２８における he が一般時制の he と同一であるとすれば、事物類も行為類や状態類と同じく時制・相マーカー he と共起できるということになる。例文２６において、時制・相マーカーが事物類と共起した場合には「～である」のような意味を表したが、例文２７－２８の he も同じく「～である」のような意味を表している。従って、事物類の表す意味について、（２２）－（２５）にならって一般化すると次のようになる。

(32)時制・相 ＋ 事物＝＞事物である（動詞）
(33)限定詞 ＋ 事物＝＞事物（名詞）

しかしながら、名詞の前に付加される he の分析には更に複雑な未解決の問題が残っており、今後の研究成果を待ちたい。

略号一覧

文法用語

ART:Article
ACC:Accusative
DEF:Definite
DEM:Demonstrative
DIR: Directional
GER:Gerund
IMP:Imperfective
INT:Intensifier
LOC:Locative
NC:Neutral case
PL:Plural
PER:Perfective
PRE:Present

ハワイ語文献

B: *Baibala Hemolele*（ハワイ語版聖書）, New York, American Bible Society, (1993).

F: Pukui, M. K. and L. C. S. Green, *Folktales of Hawaii*, Honolulu: Bishop Museum Press, (1995).

G: Elbert, S. H. and M. K. Pukui, *Hawaiian grammar*, Honolulu: University of Hawaii Press, (1979).

H: *Hawaiian Laws 1841-1842*, reprinted by Ted Adameck, (1994).

HP: *Hawaiian Phrase Book*, Tokyo:Tuttle, (1968).

K: Beckwith, M. W., *Kepelino's Traditions of Hawaii*, Bernice Bishop Museum Bulletin, 95, (1932).

M: Malo, D., *Ka moolelo Hawaii*, Kapiolani Community College, (1994).

N: *Ka Nupepa Kuokoa*, Honolulu. (新聞)

P: Makuina, M., *Ka moolelo Hawaii o Pakaa a me Ku-a-Pakaa*, Honolulu: Kalamakü Press, (1990).

S: Elbert, S. H., *Selection from Fornander's Hawaiian Antiquities and Folk-lore*, Honolulu; University of Hawaii Press, (1959).

謝辞

本研究で用いたデータの一部は文部省科学研究費補助金奨励研究(A)（課題番号09710358）の援助により収集整理したものを活用した。又、室蘭認知科学研究会の各氏には貴重なご討論、ご指導を賜った。謝意を表したい。

文献

(1)Martinet, A., 言語の本質、泉井久之助監修、紀伊国屋書店、(1971).

(2)Hopper, P. J. and S. A. Thompson, The discourse basisi for lexical categories in universal grammar, *Language*, 60.4 (1984)p703-752.

(3)Schachter, P., Parts-of-speech systems, In Shopen, T. (ed.), *Language typology and syntactic description*, Vol.I, Cambridge: Cambridge University Press, (1985) p3-61.

(4)Pawley,A.K., Samoan phrase structure, *Anthropological linguistics*, 8.8, (1966)p1-63.

(5)Elbert, S. H. and M. K. Pukui, *Hawaiian grammar*, Honolulu:University of Hawaii Press. (1979)

(6)Pukui, M. K. and S. H. Elbert, *Hawaiian dictionary*, 2nd. Edition, Honolulu: University of Hawaii Press. (1986)

(7)杉浦茂夫、品詞分類の歴史と原理、こびあん書房、(1976).